

実践

総義歯スタンダード

歯科医師がさだめ 歯科技工士がつくる

中込敏夫 著



医歯薬出版株式会社



図9～14 概形模型から得られた情報を基に「診断用義歯」が製作された。総義歯における診査・診断では、模型から得られた情報のみによって判断することはできない。最終的な総義歯治療の「診断」とは、これから術者が作り上げようとする「最終義歯」を患者が受け入れ、使いこなすことができると明確に定まったときに決定される。そのためには、それらのことを診断するための義歯が必要であり、このために製作される義歯のことを「診断用義歯」と呼ぶのである。診断用義歯の製作に関しては別稿にて詳しく述べたい

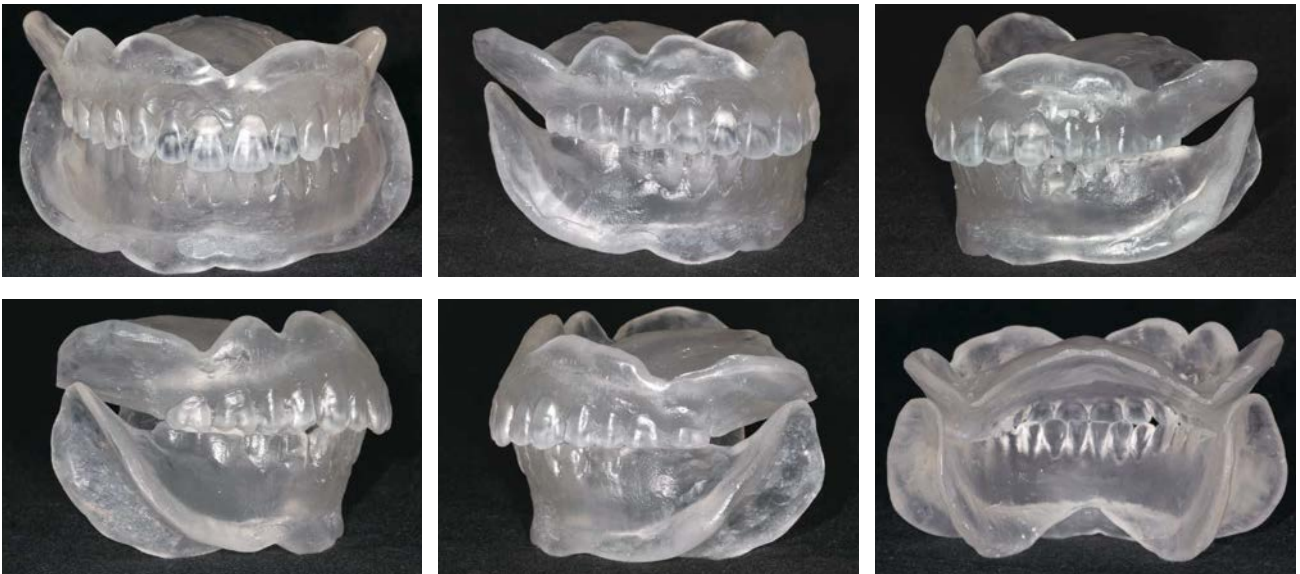


図15～21 診断用義歯によって最終的な「総義歯の形」が決定したら、これを精密に複製する。著者らはこの複製作業には寒天を用いている。そして、この複製義歯こそが、最終的な精密印象を採得するための個人トレーとなるのである。このトレーの中には床縁形態、内面形態、垂直的・水平的顎位、上下顎人工歯の排列位置、歯列弓、咬合平面、咬合面形態（ファセットなど）といった情報が組み込まれている。つまり、精密印象を採得するためのトレーとしては申し分のないものと言える

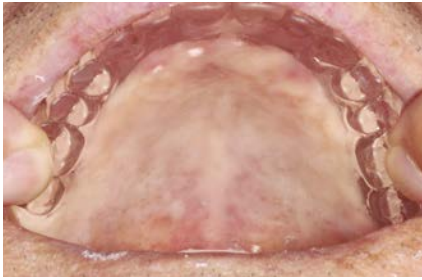


図 22, 23 トレーを透明なレジンで再現している理由は、トレー内部のプレッシャーコントロールを確実にを行うためである。本トレーの床縁形態はすでに構築されているため、特に大きく修正する必要はないが、床縁の内側、つまり内面形態の印象においては、支持域の設定を行う必要がある。これは総義歯治療に限ったことではないが、各個トレーを用いて印象採得を行う際には、特別な場合を除いて、必ず支持域を設けなければならない。総義歯の場合には、その支持域を、最終的に総義歯が咬合圧などの力を中心的に受け止める部位に設定するとよい。クリアなトレーであれば簡単にその部位を確認することができる

図 24 総義歯の最終印象に最も適した『ティッシュコンディショナーIIソフト』（松風）。流動性、ゲル化時間、粘弾性、硬化後の硬度などがバランスよく設計されている



図 25～36 採得された最終印象。総義歯の印象とは、大きく分けて二つの形を再現していることになる。一つは「床縁形態」であり、もう一つが「内面形態」である。床縁形態とは、単純に考えれば「長さ」と「厚み」である。内面形態とは、本稿で記しているように、口腔上皮の「何らかの作用を与えたときに生じる形」である。この二つの形を同時に再現するのは大変に難しいことではあるが、図で示したような各個トレーを使用することにより、確実に、また、比較的容易に採得することができる

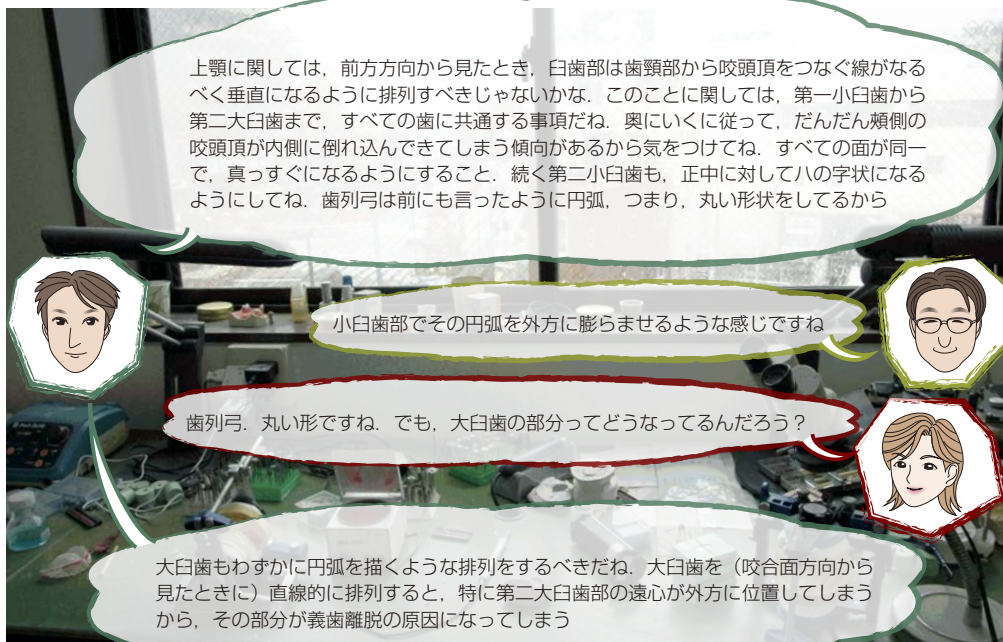


図 59 下顎第一大臼歯の排列状態を舌側から観察する



図 60 下顎第一大臼歯に続いて、下顎第二小白歯を排列する



図 61 第一大臼歯と同様に、頬側と舌側の高さが同一となる



図 62 下顎第二小白歯の排列状態を頬側から観察する



図 63 続いて、下顎第一小白歯を排列する。この際に、犬歯と第一小白歯の間に間隙がなかったり、大きく開いてしまったりする場合は、前歯部の被蓋設定に問題があるということである



図 64 NC ベラシアを用いると、第一小白歯の排列において、きわめて優れた自然感を再現することができる

置の問題で、微調整するよ。大きなズレは、前歯部の位置に問題がある場合があるから、そこから見直す必要がある。

Dr. 王：中込先生、第一小白歯は？

Dt. 中込：下顎の第一小白歯に関しては、もちろん、頬側咬頭よりも舌側咬頭のほうが低くなる。前方から見たときの頬側

面の角度は、前方の犬歯と後方の第二小白歯とのバランスを見ながら排列すればオーケーさ！実際にNCベラシアを排列するとビックリするよ。天然歯のような感じで排列できるからね。なかなかこういうふうに排列できる人工歯はない。ぜひ、やってみて。

第5章

歯肉形成

本章のポイント

- ・床縁形態と人工歯の連なりを知る
- ・上顎の基本形態を知る
- ・下顎の基本形態を知る



口腔内において、総義歯は咬合力により安定・固定されているわけではない。総義歯を構成している各部位が口腔内の組織と調和し、良好に接触することにより安定・固定するのである。総義歯を構成している印象面、咬合面、研磨面のうち、最大面積を持つ研磨面の形態付与は、総義歯の口腔内での安定化を図るための最も重要な作業と言える。

Case2 前後・左右でほぼ対称的な外形態を構築した症例

症例提供：渡部真澄 先生（東京都千代田区・麹町歯科医院）



Comment by author

形づくりという意味ではそれほど難しいケースではなかったが、年齢的に若い患者であったため、診断用義歯の段階から「少なくとも見た目を自然にするように」と注意を払った。これから長い間使う総義歯に、少しでも愛着を感じてほしいと願ったからである。担当歯科医師はほぼ全ての作業を一人で黙々とこなされる職人タイプであったため、著者は診断用義歯製作時にのみ立ち会っただけで、それ以外は歯科医師の手で診断用義歯の作り込みを行われた。